

新規購入主要文献解題

『ゴシック様式の復活』

Michael Charlesworth 著

Helm Information Ltd. 2002年4月刊行 (2040頁)

12-16世紀の中世西ヨーロッパでは、ゴシック様式が建築を中心にして絵画・彫刻・装飾などに広く用いられた。イギリスでは、18世紀中頃にはピクチャレスクな庭園が流行するようになり、また宗教建築だけでなく世俗的な建築物もゴシック様式でつくる中世趣味が盛んとなった。中世の再発見によって出現したゴシック・リバイバルは、19世紀になると最盛期を迎えたが、1870年代末には衰退に向かった。

政治家H.ウォルポールは、1747年に自邸ストロベリー・ヒルにゴシック様式の小城を建てて、『オトランド城奇譚』(1764年)を書いた。この新しい小説はイギリスのゴシック・ロマンスの先駆となった。その特徴は、高い尖塔やアーチなどの特異な外観と雰囲気によって引き起こされる人間心理の探求であり、超自然的な怪奇と恐怖の扇情主義であった。

イギリス・ロマン主義運動は、ゴシック・ロマンスの影響を受けている。その代表的詩人・批評家のS.T.コウルリッジは、中世期風の超自然的で奇怪な長編詩『老水夫行』(1798年)を創作した。彼はゴシック芸術の特徴を「無限なるもの—広大、莫大、完全とかではなく、現実の感覚的存在の領域内に限定されないものの象徴的表現」と表現している。

ヴィクトリア朝時代には、J.ラスキンは『ヴェニス石』(1851-3年)を書いてゴシック建築の礼賛を頂点にまでもたらした。さらに彼は芸術と社会・経済問題を結びつけていく。国会議事堂(1850年完成)や王立裁判所など数々のゴシック様式の公共建築物は、当時の文学の流れに大きな影響を与えた。

これまで建築と文学という二つの芸術のジャン

ルはあまり一緒に論じられなかったが、本論文コレクションは、ゴシック様式の復活と新しい文芸思潮誕生の流れを当時の全体的文化運動の一部として位置づけ、社会史、建築史および文学史からその関係性を浮き彫りにした貴重なコレクションである。
(文責・岩崎豊太郎)



『俗文学叢刊』

台湾中央研究院歴史言語研究所編、台湾新文豊出版、2002年～継続刊行中

本叢書は台湾中央研究院の歴史言語研究所内の傅斯年図書館蔵の俗文学資料を影印したものである。本叢書に収められた資料の来源は、1918年(民国7年)に劉復が北京大学において結成した「歌謡徵集処」にある。北京師範大学において周作人が始めた歌謡研究会に続いて結成された歌謡徵集処は、10年後に民間文芸班となり、民間の「俗文学」の資料収集と整理、研究及び成果の刊行を始めるに至った。この時期の研究成果として、劉復編『宋元以来俗字譜』、劉復、李家瑞共編『中国俗曲総目稿』、李家瑞編『北平俗曲略』などは今日も利用されることの多い、民間文学、俗文学の基本的な資料集である。今回、こうした目録、リファレンス作成に用いられた原資料が影印、刊行されたことは、俗文学のみならず中国文学研究者にとって極めて大きな意味をもつ。しかもこれらの資料については、すでに書目稿が公開されており、また部分的ながらネット上で閲覧も可能であっただけに、その全体を直接手にとって見ることができるのは我々にとって大いなる喜びである。

ここに収められたものは、民間の芸能において演じられたテキストであり、その価値の重大さについて、我々はようやく認識をするに至ったに過

ぎない。我々は少なくとも、これらの物語群から、小説、戯曲のルーツとなる物語の原初的形態を探ることができるし、脈々と息づいている民間信仰の中に現れる神話・伝説についても貴重な手がかりを見出すことができると思われる。中国に限らず、アジアの民間文学、民間信仰の重要な資料として大いに活用されることが期待できる。(文責・鈴木陽一)



『清蒙古車王府蔵曲本』

首都学苑出版 2001年12月

本シリーズは清代18世紀のモンゴル族貴族、喀爾喀賽音諾諺部の車布登札布、通称車王が収集した北京の戯曲、芸能のテキストを影印したものである。原本は全て刊本ではなく書写本であるが、その美麗さから、相当数が宮中の梨園で用いられていた戯曲、芸能の脚本類であろうと考えられている。また、当時、演じられた芸能を記録し、これを美麗な写本に仕立てて販売したり、賃貸する商売が相当に繁盛していたが、そこから購入したものも少なくないであろうと思われる。いずれにせよ、これだけ大量の、18世紀北京という限定のある戯曲、芸能の上演テキストを見ることができるとは、今後、中国の文学研究全体にとっても大いに意味があろうし、また北京という都市の歴史研究にも益するところ大である。

なお、前述『俗文学叢刊』には混乱の中で車王府から散逸したテキストの一部が収められている。また、『俗文学叢刊』と『車王府曲本』とを比較してみると、同じ民間の物語であっても、一般庶民の愛したものと、貴族達が好んだものとの違いが見えてくるはずで、この二つの資料を同時に購入したことで、それぞれの資料の利用価値は一層高まったと言えよう。(文責・鈴木陽一)



『大連図書館蔵孤本明清小説叢刊』

春風文芸出版社 2000年

かつて大連にあった満鉄図書館には、大谷氏より中国古典小説がまとまって寄贈された。孫楷第の目録(『日本東京所見中国小説書目——付大連図書館所見中国小説書目』)によれば、日本での写本も少なくないが、収められた小説は当時さほど評価の高くなかったものが多い。しかし、今となって見ると、ここに収められた小説の多くは明末清初に出版された、美男美女がハッピーエンドを迎えるという「才子佳人」小説と言われるもので、文学史上、『金瓶梅』に代表される明の小説と、『紅樓夢』に代表される清代小説の間の空白を埋める作品である。その意味で、すでに多くの研究者がこの作品群に着目してきたが、原本は無論のこと、書目さえも公開されてこなかった。幸いに80年代に春風文芸出版社より活字本が出版され、また現埼玉大学教授大塚秀高氏が中国側の協力を得て、短期間ながら版本調査を行い、ようやく少しずつ貴重な資料が陽の目を見るに至った。しかし、出版されたテキストの多くが天下の孤本とあって、校勘記もない活字本では使いようもないというのが多くの研究者の見るところであった。今回ようやく原本の影印本が刊行され、文学史上の空白を埋めるための貴重な資料が本格的に利用可能になったのである。

すでに、これまでの版本研究の見直しによって、15世紀から18世紀に至る中国小説史を再検討する動きが始まっており、そうした新たな研究動向にこの貴重な影印資料が大きく寄与するであろうと思われる。また、これらの資料が日本から中国へ渡っていった過程には、日本の書誌学や近代史の研究にも関わる問題が存在しており、こうした点からの活用も大いに期待されるのである。(文責・鈴木陽一)